なんもく山村ぐらし通信

移住者へのインタビュー
とらのこぱんが、できるまで

昨年南牧村に移住し、道の駅の人気商品だったとらぱんを継承してとらのこぱん作りを始めた鈴木さんに、お話を伺いました。

～まずは自己紹介をお願いします。

鈴木雄祐です。東京都板橋区出身の24歳です。

～なぜ南牧村に移住したのですか？

居心地が良かったからです。先輩の家に遊びにきたのがきっかけで村を知り、何回も来るうちに、自然とか人の魅力に惹かれていきました。車をイジれる広いガレージもあったりと色々な要因が重なり、昨年5月に移住を決めました。

～「とらのこぱん」を始めた経緯を教えてください。

移住当初はリモートで前職の仕事を続けていて、一区切りついたタイミングで仕事を辞めたのですが、その時に村のHPで「とらぱん」窯の公募の話を知りました。私は「とらぱん」のファンで、作っていた虎雄さんがパン焼きを辞められた時は「もう食べられないんだなぁ」と寂しかったんです。なので「自分が作れば」また食べるじゃん」って思っちゃったんですよね。そうしたら、みるみるやる気が湧き上がり、先輩が南牧村で起こしていた㈱サンエイト企画と一緒に計画し、実行に移しました。

～継承した「とらぱん」の味は知っていたのですか？

去年の春に食べた「とらぱん」の記憶を頼りにレシピを想像して作りました。

～楽しいなと思うことは？

パンを焼くのが楽しいです。今の時期はドンドン寒くなっていくので、窯の温度を毎回同じに保つのが難しく、日々チャレンジです。

～反対に大変なことは？

朝起きるのが大変です。会社員時代には4時起きはなかったので。それと、軌道に乗るまでの従業員確保も大変でしたね。

～今後の抱負をお聞かせください。

今まで「とらぱん」を食べてきた人たちだけでなく、若い世代にとっても懐かしい味になれたらいいなと思います。前のとらぱんはあんな味だったよね」とか「うちの村には、とらのこぱんっていう美味しいパンがあるんだ」といった、おじいちゃん、おばあちゃん、若者に共通の話題を作れればなと。「とらぱん」でなく新しい南牧のパンの一つとして、食べた人の思い出の味になれるといいですね。他にはない唯一無二の安心感あるパンを作っていきたいと思います。今後も「とらのこぱん」の改良を重ねていきますので、どうぞよろしくお願いします。

佐藤取材）

「とらのこぱん」作りを始めた鈴木さん

NEW FACE
協議会メンバー紹介

地域おこし協力隊のフォルゴー・テオドーラです。
ＳＮＳ等を使って南牧村の魅力を発信しています。
どうぞよろしくお願いします。

空き家情報をご提供願います

南牧山村ぐらし支援協議会では、村民からいただいた空き家情報を移住希望者に紹介していますが、現在、紹介できる空き家が不足しています。ぜひ空き家の情報提供にご協力願います。

【情報提供・相談窓口】
南牧村役場
村づくり・雇用推進課担当・高柳
０２７４（８７）２０１１

有害鳥獣捕獲の話

増え続ける鹿と農作物被害の解決に向けて

皆さんは、有害鳥獣捕獲というものをご存じでしょうか?南牧村を車で走っていると、頻繁に遭遇する鹿。愛くるしい姿をしているので、観光で村に来た方々は、出会うことができてラッキーと思うかもしれません。しかし、農業や家庭菜園を営む村民からすると、一生懸命育てた農作物を食い荒らす憎悪の対象でしかありません。

なぜ鹿は憎まれる対象となったのか?それには様々な要因があります。まず、全国的な生息数の増加です。天敵の不在や過去のメスの捕獲制限等により、現在その数は推定１８９万頭ほどとされています。また、植林政策による人口林の増加とその放置も、鹿が人里に降りてくる要因となっています。すべては我々人間の生活の影響によるもので、鹿自身は何も悪くないのですが、だからといって、増え続ける鹿と農作物の被害を放置するわけにはいきません。

そこで行われるのが、有害鳥獣捕獲による駆除です。３月の銃器による捕獲と猟期外の４～10月の間に、罠による捕獲が行われ、農作物を食べに人里に降りてきた鹿を駆除します。近年では、ただ捕獲して殺すだけではなく、ジビエブームの後押しもあり、食肉としての有効活用に注目が集まっています。そのため、罠免許の取得者は増加傾向にあり、捕獲の担い手として若者や女性も増えています。

南牧村に移住した際には、ぜひこの問題に取り組まれてみてはいかがでしょうか？　宮崎寄稿）

2022(令和4)年2月発行
通巻第37号版（冬季号）

発行責任者・発行元：
南牧山村ぐらし支援協議会
問合せ：南牧村役場
村づくり・雇用推進課
協議会事務局
電話：0274-87-2011(代)
紙面編集：松林・髙柳

協議会QRコード

協議会HP
https://nanmoku.org/
活動内容や各種情報を
随時更新中！

【R3年度7～12月
空き家問合せ件数】

電話：28件
(7月 4件)
(8月 6件)
(9月 6件)
(10月 2件)
(11月 6件)
(12月 4件)

メール・手紙等：38件
(7月 5件)
(8月 4件)
(9月 6件)
(10月 2件)
(11月 6件)
(12月 4件)

現地物件見学：8件
(7月 1件)
(8月 2件)
(9月 1件)
(10月 1件)
(11月 2件)
(12月 1件)

【協議会ウェブサイト
訪問・閲覧状況報告】
7/22-1/21（約180日）

ページ観覧数　83,133
サイト訪問数　11,327
サイト訪問者数 8,102
平均ページ閲覧数
1訪問当たり7ページ

ぶらりなんもく村
～おさんぽ大冒険～

近頃、子どもが歩けるようになり、一緒に近所をぶらりとするようになりました。小さい子どもとのぶらりは、タンポポ探し　種を飛ばして遊ぶため）や、ご近所の庭先のお花や置物、看板などを　お？！」と言いながら観察したりと、さながら　探検」です。

農道からの景色、見晴らしがいいです。

最近のメインの探検コースは日向雨沢地区で、さわやかホームから南牧中の対岸の農道を経由して役場あたりまでのコースです。その中でも、南牧中対岸の農道は坂が険しく、よいしょよいしょと登ると頂上あたりに日向ぼっこできるところがあり、雨沢地区を一望できて景色がキレイです。そこでひと休みしているご近所の方から　よくのぼってきたね」と声をかけてもらいお話したり、タンポポ探しをしたりします。そこからの景色を見ながら、昔はあの辺まで畑があったんだな、南牧って谷の地形だな、杉が濃いな～なんて思ったりします。

子どもと探検してみると、主役は子どもではありますが、普段何気なく通り過ぎていた道に新しい発見があったり、花や虫に季節の移ろいを感じたり、ご近所の皆さんに顔を覚えてもらったりと、探検　ぶらり）って面白いもんだなぁと感じます。

これから子どもの成長とともに探検もレベルアップし、村内のいろいろなところを探検して新発見ができるかと思うと楽しみであります。

子育て奮闘中の隊員寄稿）

タンポポの種。冬は少ないですが頑張って見つけます。

南牧消防団に入って

お世話になります、山村暮らし会員の高橋です。南牧村での生活が始まりしばらくたったように感じていましたが、まだ冬は四度しか経験していないと考えると生活にも慣れてきたとは中々言えないな、と思う今日この頃です。

そんな南牧村４年目の私ですが、今年に入りお声がけしていただき消防団に入りました。仕事や趣味とは別に自分の住んでいる村のための組織に所属するということが初めてでしたので新鮮な気持ちもあり、火事を相手にするという怖さもあり、火防や練習でも緊張してしまいます。以前は消防と言われると自分の住んでいる地域のことでありながらどこか遠い、公的な方々に任せるものだと思っていました。しかし実際に南牧村で消防団として制服に身を包み火防などに参加しているとは僅かですが村に貢献できている様な気がしてきて、より南牧村で生活しているんだという意識が強くなっていきます。消防は無理せず、しかし有事の際はしっかりと動けなければならない中々難しい活動ですので、南牧村のためにこれからも心身ともに成長させていけたらと思います。まだまだ寒く、空気も乾燥しておりますので暖かくなる日を待ちながら皆様も体調・火事にお気を付け下さい。

高橋寄稿）

昨年11月21日合同火防の様子

南牧村の季節の風景
-自然の恵みいただきます-

秋の風物詩のひとつである　干し柿」。南牧村では昨年柿が当たり年だったそうで、村のあちこちのお宅の軒先にオレンジ色のつるし柿がずらりと並ぶ景色を目にすることができました。

もともと柿は、血管を広げ血流促進するシトルリンというアミノ酸の一種や、優れた抗酸化作用を持つカロテノイドなどの栄養素に加え、食物繊維はごぼうの5倍、ポリフェノールは干しブドウの3倍を含む優秀な果実です。ただ、生の柿には体を冷やすという欠点があります。それがなんと、干し柿にすることで体を温める性質に変化するらしいのです。渋い柿の水分が飛んで栄養素も凝縮され甘味も強くなり、スイーツ感もアップすることを知って、自分も機会があればぜひ作ってみたいと考えていました。

そのあとすぐに、お手伝いをしている放課後学童クラブで干し柿を子供たちと作る機会をいただきました。南牧小学校にも柿の木があり、立派な実がたくさん実っていたのでした。まず小学校から許可を頂きました。そして、子供達には吊るせるように少し枝を残すように伝えて取ってもらいました。ＹｏｕＴｕｂｅで手順を確認して、子供たちとわいわい楽しく作業しました。後で経験者の方々のお話を伺うと、下部の皮を少し残しておくとよかったそうです。ただ、お天気も味方してくれて、出来上がりは上々でした。そして、出来上がった干し柿を校長先生に届けた時の子供たちの笑顔は、とっても素敵でした。また、子供たちの中には初めて干し柿を食べたという子もいて、それぞれにとって思い出に残る体験になったようでした。干し柿作りを通して、私自身も改めて渋い柿を美味しくいただく先人の知恵に感動しました。

南牧では当たり前のように行われてきた干し柿作りって、本当はとても貴重で素晴らしい活動なんだと感じました。そして最近耳にするＳＤＧｓ　持続可能な開発目標）の先駆けなんだなと思います。子供たちと一緒に体験することで、気付けることがたくさんあり、刺激になりました。これからもいろんな南牧村の魅力を子供たちとともに見つけていけたらと思います。

高柳寄稿）

秋の空にずらりと並び映える干し柿